

SAFE プロジェクト実践報告

大伴茉奈（桐蔭横浜大学）、鶴健一郎（帝京大学）、細川由梨（早稲田大学）

1. はじめに

長野県上田市菅平高原には、100 面を超えるラグビーグラウンドがあり、夏季休暇に入ると日本全国のラグビーチームが合宿のために集結します。菅平高原の標高は約 1300m あり、平地よりも気温が低く、夏場でも過ごしやすい環境です。7 月の海の日を過ぎると、小学生のラグビースクールが続々と大きなバスで山を上ってやってきます。7 月の終わり頃には中学生が続々と集まってきました。菅平の旅館は時期ごとに様々なカテゴリーのラグビー選手たちを順番に受け入れています。8 月に入るといよいよ高校生が沢山集結します。お盆過ぎまでは高校生が日本全国から集まり、100 面を超えるグラウンドのほとんどがラグビー選手で埋まり、あちこちから元気な声や激しいぶつかり合いの音が聞こえてきます。お盆を過ぎると大学生や社会人のチームも上ってきます。この 2 ヶ月間で菅平高原には約 9 万人のアスリートが訪れます。

2. 事故がきっかけ

2021 年に夏季合宿へ来ていた大学のラグビー選手が、市営グラウンドで行われていた練習試合中にタックルをする様子を見せた後、突然うつ伏せに倒れてしまいました^{1,2)}。試合を見ていた人には何が起こったのかわからないくらい静かに倒れていきました。その時、試合のレフリーを務められていたのが、心臓血管外科の医師であったため、異変に気が付き、迅速な救急対応が行われました。すぐに心肺停止を疑い、心臓マッサージ（胸骨圧迫）を開始しました。そのレフリーの方は、心臓マッサージを行いながら、「あなた、AED を持ってきて！」と周囲の人に助けを求めました。しかし、そのグラウンドには AED が設置されておらず、グラウンドから少し離れた管理棟にのみ設置されていました。そのため、周りで見っていた選手や関係者は管理棟へ走って AED を取りに行き、マネージャーさんは隣のグラウンドに「AED を持っていないですか？」と聞きに行き、それぞれ AED がありそうな場所へと一生懸命に動き回りました。心臓マッサージを始めてから約 3 分後に管理棟に設置されていた AED が

届き、すぐに作動し、選手はその場で呼吸が戻り、幸いにも一命を取り留めました。

3. プロジェクト立ち上げに向けて

2021 年の秋に事故のあったグラウンドの隣のグラウンドにいて、マネージャーさんに声をかけられ、AED を持って駆けつけたアスレティックトレーナーの鶴健一郎氏から、菅平は意外と安全じゃないかもしれない、と相談を受けました。「“もしも” その選手が倒れてしまった場所が市営のグラウンドではなく山奥のグラウンドだったらどうなっていたのだろうか」、「“もしも”レフリーが医師でなかったら助かっていたのだろうか」と、夏にあった事故で感じた危機感を共有してくれました。しかし、菅平で行われているラグビーの試合や練習のほとんどがその“もしも”の状況であり、今回助かった選手がたまたま整った環境でプレーしていただけだったのです。

そこで、2021 年の終わりにスポーツセーフティーを専門に研究している研究者やアスレティックトレーナーで SAFE プロジェクトを立ち上げました。Sugadaira AED For Everyone と称して、どうやったら 100 面を超える全てのグラウンドに AED が用意できるのかを考え、日本ラグビーフットボール協会（以下、ラグビー協会）の安全対策委員会に相談をして、プロジェクトが確立していきました。2022 年度にはラグビー協会から SAFE プロジェクトに対して予算が下り、AED のレンタル事業を展開しているセコム株式会社も協力してくれることになりました。菅平では夏の 2 ヶ月間に集中して人が集まるため、その期間だけの AED レンタル体制をセコムの方々が整えてくれました（写真 1）。

予算確保や AED の手配と並行して、菅平の観光協会や旅館組合、グラウンド部会にも相談をし、どうやったら菅平の全てのグラウンドに AED を配置することができるかをみんなで検討しました。心停止を疑ってから 3 分以内に AED を使用することが望ましいため、プロジェクトメンバーで現地に出向き、旅館からグラウンドまで歩いたり、グラウンドの端から隣のグラウンドまで走ってみたりして、有用的な AED 設置

場所を探してみました。しかし、プロジェクトメンバーや菅平の方々と相談した結果、グラウンドに設置するのではなく、グラウンドを所有している旅館に AED を配置し、旅館からグラウンドへ行く際に各チームが AED を持ち出す（貸し出す）形にまとまりました（写真2）。教育的な意味も込めて、練習や試合に行く前に旅館のフロントで部屋の鍵を預けるのと同時に AED を借りてグラウンドに向かう、というルーティンを作り、普段から AED を練習や試合の環境に持っていき重要性を伝えよう、となりました。防犯上の問題もありましたが、グラウンドに直接設置するよりも、毎回運び出すことによって、より AED を身近に感じてもらうことができたのではないかと感じています。

頂きました。旅館の方々からは、「貸し出す側が使い方を知らないのは抵抗があったから講習を受けられて良かった」、と言って頂きました（写真3、4）。



(写真3 一次救命講習講義の様子)



(写真1 AED 準備の様子)



(写真4 一次救命講習実技の様子)



(写真2 AED 貸出制度（旅館）の様子)

また、AED を貸し出す側の旅館の方々には、貸出制度導入に際して AED の使用方法を含めた一次救命処置に関する講習会を受けて頂きました。講習会の講師は、普段は DMAT（災害派遣医療チーム）として活動しており、休日はラグビーのトレーナーをされている方に引き受けて頂き、みっちり講義と実技を行って

4. SAFE プロジェクトの実装

このような経緯によって 2022 年度には、物（AED）や制度が整い、プロジェクトを実装することが叶いました。より多くの人に制度を知ってもらうためにポスターを作成して菅平の至る所に掲示したり、SNS を利用して周知も行いました。全ての人にとって初めてのプロジェクトだったので、開始から 2 週間は各旅館を巡回して利用状況を聞いたり、グラウンドを巡回して AED を持ってきているか探したりしました。AED を利用してくれているチームの関係者には、自チームでは用意できなかったから助かった、という声や、旅館の方々からもやっぱり大事だね、必要だね、というポジティブな感想を聞くことができました。しかし、巡回していると、持ってくるのを忘れてしまった、というチームや、相手チームのホームコートなのに AED を持ってきてくれていなかったのが困った、というネ

ガティブな声も聞きました。

実装した期間中に AED を利用する事案は発生しなかったため、用意した AED を使用する機会はありませんでした。もちろん、使用しないで済むのであれば問題はないのですが、管理が行き届かずに「あるべきものがない」状況も発生してしまったため、様々な意見も頂きました。実装してみたことによって新たな課題も出てきたため、次年度以降はどのように改善するかを話し合い、プロジェクトメンバーで内容を再検討しました。

5. SAFE プロジェクトの進展

2023 年度も同様の予算等を頂くことができたため、2022 年度と同様のプロジェクトを実装することができました。次の段階として、「AED を使える人」を増やすことを目的に AED を使用した一次救命処置の講習会をラグビーチーム対象に実施しました。菅平の全ての旅館に対して菅平観光協会から講習会実施の連絡を FAX で流して頂き、興味のあるチームは応募してもらうことにしました。講習の対象が菅平で合宿をしているチームだったこともあり、合宿期間中はスケジュール調整が難しいため、応募チームは少なかったのですが、2 つの高校と 3 つの大学から応募して頂きました。高校の 2 チームは知り合いに協力して頂き、過密スケジュールの中、夜のミーティング後に選手やマネージャーが受講してくれました（写真 5）。



(写真 5 高校生受講の様子)

講習会の様子を NHK の方が取材をしてくださり、受講した選手は「AED の使い方などを学べてよかったです。一緒にプレーしている仲間は自分の宝なので、

何かあったらいち早く行動したいです。」や、「講習を受けて命の大切さが分かりました。いざという時は今日学んだことを生かして対応したいです。」と話していました³⁾。

大学チームへの講習は 2 回実施することができました。1 チーム目は、スポーツ関連の学部がない大学の学生スタッフから、「普段学ぶ機会がないので是非お願いしたい」と依頼がありました。講習のために宿舎へ伺うと、当初の予定では学生スタッフだけの参加でしたが、最終的には監督やコーチも含めた全スタッフが参加してくれることとなりました（写真 6）。全員が一生懸命に受講してくださり、監督からは「本当に大事なこと、全チームが受講すべき内容だと思う。」と言って頂きました。もう 1 つの応募は、2 チームの学生スタッフが合同で申込みをしてくれました（写真 7）。この 2 チームのうち 1 チームは、2021 年に菅平で心肺停止が発生した時の対戦相手でした。そのようなきっかけもあり、今回応募してくださいました。どの受講者も熱心に受講しており、大切な仲間を守ることに ついて真剣に向き合ってくれたように感じました。



(写真 6 監督・コーチ陣受講の様子)



(写真 7 学生スタッフ受講の様子)

6. さいごに

筆者はスポーツ関連脳振盪の研究調査を菅平高原で約10年以上行ってきました。毎年、8月に3週間ほど調査を行っており、その間は菅平に滞在しています。そのため、この10年の間に菅平の方々には沢山面倒を見て頂きました。旅館の方々からは名産品の高原レタスを頂いたり、旅館の食事をラグビー選手たちと一緒に頂いたこともありました。ラグビーチームの関係者はもちろんのこと、観光協会やグラウンド部会の皆様、旅館の方々とも毎年沢山お話をさせて頂きました。そのような関係性があつたからこそ、みんなで実装できたプロジェクトだったのかなと実感しています。誰か1人だけが頑張るのではなく、みんなで一緒に解決しようと取り組んだプロジェクトでした。2024年以降は、どのように継続していくかが新たな課題でもあります。2021年から立ち上げたSAFEプロジェクトは年を増す毎に協力してくれるメンバーも増え、できることも少しずつ増えていきました。菅平というラグビー選手にとって大切な場所で、沢山の人の思いにも触れました。だからこそ、菅平で安全について考えたり、AEDに触れる機会を作ること、自分たちの地元にも安心安全の認識を持ち帰ってほしいと考えています(写真8)。自分たちが活動するスポーツ現場にAEDがあることは特別なことではなく当たり前なんだ、という状況をこのプロジェクトを通じて波及できたらと願っています。



(写真8 AED貸出制度を利用している様子)

謝辞

本プロジェクトを遂行するにあたってご協力頂きました、日本ラグビーフットボール協会安全対策委員会の齋藤守弘氏、塚崎有氏、中陳慎一郎氏、セコム株式会社の佐藤謙一氏、大矢根鴻彬氏、TEAM KANOHの加納悠多氏、国土舘大学の曾根悦子氏、大木学氏に感謝申し上げます。また、多大なるご理解とご協力を賜りました菅平高原の皆様、ラグビー関係者の皆様にも心より御礼申し上げます。

参考資料

- 1) NHK NEWS WEB, 「ラグビー合宿の聖地 菅平高原に105台のAEDを」, 2022年8月28日掲載, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220828/k10013787101000.html>
- 2) 朝日新聞デジタル, 「菅平グラウンド全105面にAEDあるラグビーの「事故」を経て」, 2022年8月27日掲載, <https://www.asahi.com/articles/ASQ8V357ZQ8SUTQP014.html>
- 3) NHK 信州 NEWS WEB, 「ラグビープレー中の突然死防止へ菅平高原でAED講習会 上田」, 2023年8月17日掲載, <https://www3.nhk.or.jp/lnews/nagano/20230817/1010027843.html>